

令和 5 年 6 月 7 日現在

機関番号：10102

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2022

課題番号：18K02795

研究課題名（和文）特別支援学校併設寄宿舎の教育的機能に関する実証的研究

研究課題名（英文）Empirical Research on Educational Function of Boarding Houses Installed in Schools for Special Needs Education.

研究代表者

小野川 文子 (Onogawa, Fumiko)

北海道教育大学・教育学部・教授

研究者番号：50738557

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,300,000円

研究成果の概要（和文）：多くの障害児は限られた人間関係と単調な生活を余儀なくされ、しかも年齢が高くなればなるほど固定化する傾向にあることが明らかとなった。また保護者の就労や健康問題も大きく、とりわけ障害が重い、または年齢が低いほど困難であることが示された。

親元から離れた生活が経験できる寄宿舎は、とくに年齢が低い時期に子どもの身辺自立や精神的自立を促し、保護者の就労保障や健康面を支えていることが示された。こうした寄宿舎の「社会性や自立を育む」取り組みは全ての子どもに不可欠であり、「通学困難のための寄宿舎」から「生活教育を必要とする障害児の寄宿舎」「寄宿舎教育を必要とする全ての子どもを対象とした運営」が求められる。

研究成果の学術的意義や社会的意義

発達の困難を有する障害児においては、多くが経済的貧困をベースに生活の質や人間関係等が乏しく、そのリスクも高い。しかし、その生活実態は十分に明らかにされず、教育課題としても位置ついていない。特別支援学校寄宿舎は、通学保障のみならず、障害児の発達支援（生活リズムや社会性の獲得等）と家族を含めた生活支援の役割を果たしてきた。しかし、寄宿舎の統廃合が進んでいる今、病気や障害のある子どもの「生活と発達の困難」を明らかにし、寄宿舎の今日的役割・機能を明らかにすることは、発達の困難を有する全ての子どもの自立や社会参加を支える生活支援、保護者の就労、家族の健康を含めた総合的支援の充実に寄与できると考える。

研究成果の概要（英文）：It was clarified that many children with disabilities obliged to have limited human relations and monotonous living, and that the conditions tended to be fixed as age increased. The living situations were difficult as children's disability was heavier or the age was lower, and the employment and health problems of parents were also greatly affected. It was shown that a boarding house, where children can experience life away from their parents, encourages children's physical and mental independence, especially when they are young, and supports their guardians' job security and health. Such efforts for "development of society and independence" in boarding houses were essential for all children. Therefore, it has been demanded to change from "boarding houses just for difficulties of school attendance" to "boarding houses for children with disabilities who needs education for living" and to "management for all children with needs of education at boarding houses".

研究分野：特別支援教育

キーワード：特別支援学校併設寄宿舎 特別支援教育 寄宿舎教育

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

(1) 特別支援学校に併設された寄宿舎は、子どもの発達支援・生活支援のみならず家族を含めた支援をおこなってきたが、2007年の特別支援教育制度の移行後、全国的に寄宿舎の統廃合が進んでいる。とりわけ、視覚障害校・聴覚障害校と比較すると知的障害・肢体不自由・病弱校は極端に設置率が低く、統廃合が顕著である。

(2) 報告者は、これまで、肢体不自由校および肢体不自由校の当事者、保護者、教職員を対象とした調査研究を行い、寄宿舎の教育的役割を明らかにしてきた。一方で、最も在籍数が多く、ますます増加傾向にある知的障害児とその家族における寄宿舎の教育的役割を明らかにする必要がある。

2. 研究の目的

(1) 知的障害特別支援学校に在籍する児童生徒の保護者・教職員に対して生活実態調査を実施し、病気や障害のある子どもの「生活と発達の困難」を明らかにし、特別支援学校併設寄宿舎の今日的役割を考察する。

(2) 寄宿舎を併設する特別支援学校と併設していない特別支援学校の保護者・教職員の調査結果を比較検討し、その相違点を明らかにすることで、寄宿舎の教育的機能・役割を考察する。

(3) 卒業生からのインタビュー調査から、当事者の視点から今後の特別支援学校併設寄宿舎の役割を問い直すと共に、卒業後の彼ら生活から学齢期に寄宿舎を経験することの意義を明らかにする。

3. 研究の方法

(1) 北海道の知的障害特別支援学校(45校)に在籍する児童生徒の保護者および教職員に対して質問紙法調査を実施し、知的障害のある生徒とその家族の生活実態を明らかにし、必要な発達・生活支援のあり方について考察する。なお、北海道は地理的条件から多くの知的障害特別支援学校に寄宿舎が併設され、全国の寄宿舎生の1/4を占めることから調査対象とした。

(2) 北海道の知的障害特別支援学校寄宿舎に入舎している高校生に対し半構造化面接法調査を実施し、本人・当事者の困難・ニーズを明らかにし、求められる寄宿舎教育の役割を考察する。

(3) 全国の特別支援学校寄宿舎の政策動向を調査し、今後の特別支援教育における特別支援学校併設寄宿舎の今日的機能・役割について明らかにする。

4. 研究成果

(1) 知的障害児とその家族の生活実態

北海道の知的障害特別支援学校在籍の児童生徒とその家族の生活実態について調査を行い、知的障害児の「育ちと発達の貧困」の内容とそれらが知的障害児の学習・発達面にどのような影響を与えているかを検討し、生活上の困難・支援ニーズに対して、どのような支援が求められるのかについて考察した。

多くの知的障害児は限られた人間関係と単調な生活を余儀なくされ、しかも年齢が高くなればなるほど固定化する傾向にあることが明らかとなった。また、保護者の就労や健康問題も大きく、とりわけ障害が重い、あるいは、年齢が低いほど困難であることが示された。

近年、知的障害児やその家族に対する支援も徐々に拡充してきているが、さらに保護者の就労や健康問題も含め、知的障害児の「自立(経済的自立・社会的自立)」に向けた支援、発達の視点を踏まえた生活支援等の知的障害児の家庭を総合的に支える権利保障システムが不可欠である。

(2) 知的障害児とその家族における寄宿舎の教育的機能

知的障害児とその家族が有する「育ちと発達の困難」の実態と支援ニーズを検討し、それに対する知的障害特別支援学校併設寄宿舎の教育的機能・役割を明らかにした。寄宿舎生数が全国の1/4を占める北海道の知的障害特別支援学校を調査対象とし、通学生・寄宿舎生の両保護者調査を比較検討することで寄宿舎の教育的機能・役割を検討した。

調査方法は郵送質問紙法調査、調査対象は北海道の寄宿舎併設知的障害特別支援学校27校の保護者であり、回収数は通学生保護者189人、寄宿舎生保護者313人、合計502人であった(回収率:30.8%)。調査期間は2017年6月~8月。

親元から離れた生活が経験できる寄宿舎は、とくに年齢が低い時期に子どもの身辺自立や精神的自立を促し、保護者の就労保障や健康面を支えていることが示された。また、寄宿舎教育の課題としては第一に、子どもの年齢が低い時期に多くの保護者が「育ちと発達の困難」に対する支援ニーズを有していることから、高等部入舎が多い寄宿舎では入舎対象年齢を広げることにも検討する必要がある。第二に、障害児とその家族が有する「育ちと発達の困難」と支援ニーズに対する寄宿舎教育の機能・役割は重要であるが、寄宿舎教育だけに依存する支援体制は危険であり、寄宿舎に入舎している時期にも障害児とその家族を地域で支える体制を築いていくことが不可欠である。

(3) 知的障害・発達障害を有する高校生からみた寄宿舎の教育的機能

知的障害・発達障害を有する高校生は、小中学校時代にコミュニケーションや人との関りの困難を抱えていることが明らかとなった。しかし、高等特別支援学校や併設された寄宿舎での生活を通して、生活技術の獲得や生活リズムの確立、そのことが卒業後の自立した生活への意欲や見通しにつながっていることが示唆された。また、困難と感じていたコミュニケーションや人との関わりが、いつの間にかできるようになり、さらには自ら考えて行動できるようになったと実感していた。親から離れた仲間との生活は確実に子どもの主体性を育てている。学校で身に付けた力・技術(スキル)を生活の中で発揮できてこそ「生きる力」となる。日常生活を通して「生きる力」を育てることが寄宿舎教育であり、今後一層求められる機能・役割であると考えられる。

また、障害児の生活がきわめて単調であり、人間関係や経験の乏しさが、思春期・青年期以降も続いているが、多くの場合はそのような生活に不満も苦痛も感じていない。しかし、寄宿舎での何気ない友達との会話や関わり、遊びを通して、はじめて単調な生活を退屈だと気づくのである。思春期・青年期にこそ人間関係の広がり、豊かな生活経験・社会経験が重要であり、感情を豊かにし、思考を深めるのである。寄宿舎教育はその役割を果たしていると考えられる。

(4) 全国の特別支援学校寄宿舎の動向とこれからの寄宿舎教育の課題

47 都道府県教育委員会および全国の寄宿舎併設特別支援学校 293 校のウェブサイト調査を通して、特別支援学校寄宿舎の現状と役割・機能を明らかにし、今後の課題を検討した。

2007 年度の特別支援教育の制度化やその後のインクルーシブ教育の展開の中で、寄宿舎教育の充実や新たに寄宿舎併設特別支援学校を開校した自治体と、寄宿舎生減や学校の再編整備計画の中で寄宿舎の統廃合を促進する自治体に二極化していく傾向が近年の特徴である。寄宿舎の統廃合が進み、視覚障害特別支援学校・聴覚障害特別支援学校においても危機的状況にある実態が明らかとなった。

一方で、寄宿舎における「基本的生活習慣」「社会性」「社会的自立」「生きる力」の支援が寄宿舎併設の特別支援学校の特色として積極的に打ち出されており、多様な実践が展開されていることが示された。こうした寄宿舎の「社会性や自立を育む」取り組みは全ての子どもに不可欠であり、「通学困難のための寄宿舎」から「生活教育を必要とする障害児の寄宿舎」「寄宿舎教育を必要とする全ての子どもを対象とした運営」が求められている。

寄宿舎教育における子どもと家庭の「生活と発達の支援」は、全ての子どもの健全育成にとっても重要であり、生活支援と発達支援を必要とする全ての子どもを視野に入れた寄宿舎教育のあり方を創造する時期にきている。

<引用文献>

小野川文子・高橋智、知的障害児とその家族の生活実態の検討 北海道の知的障害特別支援学校の保護者調査から -、発達障害研究、第 43 巻第 1 号、2021、77-90

小野川文子・高橋智、知的障害児の「育ちと発達の困難」の実態と寄宿舎教育の役割 寄宿舎併設知的障害特別支援学校の保護者調査から、SNE ジャーナル、第 24 巻第 1 号、2018、154-165

小野川文子、高等特別支援学校(知的障害)寄宿舎教育に関する寄宿舎生への聞き取り調査、人間発達研究所紀要、第 35 号、2022、67-82

小野川文子・高橋智、全国の特別支援学校寄宿舎の現状と課題 都道府県教育委員会・寄宿舎併設特別支援学校のウェブサイト調査より、SNE ジャーナル、第 25 巻第 1 号、2019、124-135

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小野川文子	4. 巻 56
2. 論文標題 コロナ禍における障害児への影響と学校の役割ー特別支援学校の保護者調査から	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本の科学者	6. 最初と最後の頁 12-17
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小野川文子・高橋智	4. 巻 43
2. 論文標題 知的障害児とその家族の生活実態の検討ー北海道の知的障害特別支援学校の保護者調査から -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 発達障害研究	6. 最初と最後の頁 77-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小野川文子・高橋智	4. 巻 25
2. 論文標題 全国の特別支援学校寄宿舎の現状と課題 - 都道府県教育委員会・寄宿舎併設特別支援学校のウェブサイト調査より -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 SNEジャーナル	6. 最初と最後の頁 124-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 小野川文子・高橋智	4. 巻 24
2. 論文標題 知的障害児の「育ちと発達の困難」の実態と寄宿舎教育の役割 - 寄宿舎併設知的障害特別支援学校の保護者調査から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 SNEジャーナル	6. 最初と最後の頁 154-165
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小野川文子
2. 発表標題 当事者調査からさぐる高等特別支援学校寄宿舎の役割 寄宿舎に入舎する高校生への面接法調査から
3. 学会等名 日本特別ニーズ教育学会第26回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小野川文子・柴田真緒・高橋智
2. 発表標題 知的障害・発達障害を有する高校生の「睡眠困難」と支援の課題 - 特別支援学校寄宿舎生徒と発達障害を有する高校生の調査から -
3. 学会等名 日本特殊教育学会第57回広島大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小野川文子・高橋智
2. 発表標題 全国の特別支援学校寄宿舎の現状と課題 - 都道府県教育委員会・寄宿舎併設特別支援学校のウェブサイト調査より -
3. 学会等名 日本特別ニーズ教育第25回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 小野川文子・高橋智
2. 発表標題 知的障害児の「育ちと発達の困難」の実態と寄宿舎教育の役割 寄宿舎併設知的障害特別支援学校の保護者調査から -
3. 学会等名 日本特殊教育学会第56回大阪大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小野川文子・高橋智
2. 発表標題 寄宿舎併設知的障害特別支援学校の教職員調査からみた寄宿舎教育の役割と課題
3. 学会等名 日本特別ニーズ教育学会第24回研究大会
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 藤本文朗・小野川文子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 文理閣	5. 総ページ数 229
3. 書名 人権としての特別支援教育	

1. 著者名 高橋智・加瀬進	4. 発行年 2020年
2. 出版社 文理閣	5. 総ページ数 317
3. 書名 現代の特別ニーズ教育	

1. 著者名 小野川文子	4. 発行年 2022年
2. 出版社 かもがわ出版	5. 総ページ数 138
3. 書名 特別支援学校寄宿舎のまどから一子どもの育ちを社会にひらく	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	高橋 智 (TAKAHASHI Satoru) (50183059)	日本大学・文理学部・教授 (32665)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関